

林産技術普及協会会長に就任して

一般社団法人 北海道林産技術普及協会
会長 高橋範行



4月19日に開催された年次総会において、歴史ある普及協会の第八代目会長に就任いたしました。創立60周年を節目に、高橋秀樹前会長の後を継ぎ、若輩者ですが当会の発展のために微力乍ら精一杯努めさせていただく所存です。

就任のご挨拶でもお話ししましたように、世界的木材有用資源が希少資源となった今、木材加工技術の進歩が真に求められる時代になったと思っており、いかに天然林、これから出材される人工林を有効利用するかが、これから木材産業の浮沈にかかわることになり、当会の支援団体の林産試験場様との連携をはかりながら、一步進んだ林産技術の開発普及に努めたいと思っているところです。

このところ、植林木として戦後植樹された人工林の伐採期となり、国産材が脚光を浴びております。アベノミクスで円高に終止符が打たれ、一気に円安が定着しつつある現在、コスト競争力に問題であった国産材が表舞台になってきています。木材利用促進法及び今年新たに木材利用ポイント事業の創設により、主要構造材及び内・外装材に一定の条件を満たした住宅には、最高60万ポイント（金額換算￥600,000）を還元するという林野庁の直轄事業により、最近同国産材の問い合わせが増えていることは、歓迎すべきことだと思います。

確かに、国産材の比率を上げるという政策は、一面方向性としては、森林国である日本にとっては、産地の地場産業の振興という意味でも正しい政策とは思いますが、一言率直な苦言を言わせていただけることをお許しいただけるなら、

- ① 日本の需要を、全て人工林の国産材で賄うには到底無理があることを認識すべきで、輸入材がある程度使用されて始めて、国産材が生きてくることを理解すべきではないか。
- ② 針葉樹ばかりがその政策の根底にあり、建築で使用される木材としては、内装材には広葉樹を使用しているとの日本の建築史を理解すべきで、木材利用ポイントにおいて広葉樹がその樹種指定されなかったことは、片手落ちの感を否めない。
- ③ 世界的に木材資源が少なくなっている現状で、各国においては、再生可能な木材としての植林木が脚光を浴びており、これらの認証材も国の政策として、国際国家の一員として有効に使用すべきと思う。東南アジアでは、ゴム、ファルカタ、アカシアマンギューム、パームヤシ等の樹種が植林されているし、またニューシーランド、南米のラジアータ材、オーストラリアのユーカリ材と、植林木として世界的に使用されているもので、そのコストは円安の影響で多少の価格アップはあるが、まだまだ国際競争力のあるもので、国産材のカラマツ、トドマツ、スギ及びヒノキ等の植林木と同様、資源論から有効利用すべき材と思う。

したがって、輸入材と国産材の共存を図るべきで、いたずらに国産材使用を叫ぶのは、木材各樹種が持つ特徴、特性を考慮せず、ただ国産材を賛美するあまり、旺盛な需要に対応できず、逆にコスト高を招く結果に繋がることを危惧せざるをえません。さらに、将来の我々の子孫の財産を、今の世代が食い尽くすことにつながらない様にしたいものです。

植林されたのは針葉樹がメインであったことは否めない事実ですが、一方、北海道には世界に冠たる有用広葉樹がまだまだ蓄積量もあるはずです。高級家具内装用の無地無欠点を採材できる原木は、確かになくなってきたことは事実ではありますが、広葉樹の持つ美しい木目、その耐久性を最大限に活用するには、所謂キャラクターをうまく利用することが今後の課題と思っています。無地板が取れない理由で、木目を印刷した紙、シート貼りの各種建材が残念乍ら現在の建材メーカーの主流になっていることには、木の文化が生活に根付いている日本にとり残念なことと思います。

天然木と、木目を印刷したものとは全く異なることを、末端需要家に正しく伝わっているのか疑問が残るところです。突板業界が、このことを盛んに指摘しておりますので、商品の原材料を正当に表示する（無垢板か、天然突板か、印刷物か）ことが、今後の日本の木の文化を継承する意味でも、また木材業界の復権のためにも、必要なことと思います。

本物、偽物の区別を業界がきちんと情報発信することが、今後の木材業界にとって必要不可欠な課題となると思いますし、普及協会も本件、サポートしていく必要あると考えております。